

ルカによる福音書21章5-38節 「近づいた贖い」

1A 終わりの前兆 5-28

1B 惑わし 5-9

2B キリスト者への迫害 10-19

1C 世界での徴 10-11

2C キリスト者の忍耐と証し 12-19

3B エルサレム包囲 20-24

4B 天変地異 25-28

2A 目を覚ました祈り 29-38

1B いちじくの木为例え 29-33

2B 突然の災い 34-38

本文

ルカによる福音書 21 章を開いてください。午前礼拝で 21 章 1-4 節まで見ましたので、その続き 5 節以降を一節ずつ見たいと思います。

1A 終わりの前兆 5-28

1B 惑わし 5-9

5 さて、宮が美しい石や奉納物で飾られている、と何人かが話していたので、イエスは言われた。
6 「あなたがたが見ているこれらの物ですが、どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ます。」

イエス様と弟子たちは、これまで神殿の境内にいました。宗教指導者たちについてイエス様は、彼らが長い衣を着て歩き回ることが好きで、広場で挨拶されることが、会堂の上席、宴会の上座を好む話をされました。また、やもめの家は食い潰すのに、見栄を張って長く祈りますということも言われました。なので、「より厳しい罰を受けるのです。」と言われました。このように、神殿の中であってはならぬこと、偽善と腐敗がはびこっていたのです。かつて、バビロンによってエルサレムの神殿が滅ぼされましたが、まさに神殿の中で忌まわしい偶像礼拝が行われていたことを、主は預言者エゼキエルに見せられましたが、それゆえに神殿が破壊されましたが、今も、その危険の中に会ったのです。

ここで、「宮が美しい石や奉納物で飾られている」ことを人々が話しているのですが、真に美しいもの、真実な奉納物は、1-4 節に出てきた、貧しい寡の献金でした。「この人は、乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」とイエス様は言われています。私たち

は、そうした美しい石、美しい奉納物に目が留まりますが、主の目は美しい、献げる心、犠牲の心に向けられているのです。

ところで、この宮は一般に「第二神殿」と呼ばれます。紀元前 586 年、バビロンによって破壊されたソロモンの建てた神殿を「第一神殿」と呼びます。バビロン帰還後に、ゼルバベルとヨシュアによって再建した神殿を第二神殿と呼びます。ヘロデ大王がエルサレムの王となった時、彼はこの神殿の大改修を行いました。ほとんど建て直すような形でその工事を行いました。その敷地はモリヤ山の上にあります。山腹を平らにする敷地作りをします。なんと紀元前 20 年から紀元 64 年までかかったと言われています。イエス様のおられた時にも、まだ工事は完成していませんでした。ヨハネ 2 章で、イエス様の公生涯の初期にあった宮清めで、ユダヤ人指導者は、「ヨハ 2:20 この神殿は建てるのに四十六年かかった。」と言っていましたね。そして、神殿は大理石で造られ、金の板が張られていました。日が差すと、その反射光が眩しくて目を向けることができないほどだったそうです。

しかし、イエス様はその廃墟となる姿を語られています。語られた約 40 年後、「ユダヤ戦争」が起こります。それまでローマの圧政に不満であったユダヤ人たちですが、ついにカイサリアでユダヤ人が殺害されたのがきっかけで、熱心党による暴動が起こりました。そしてそれが、ユダヤ人の住む全土に反ローマ運動となって飛び火して、ローマ皇帝ネロは、将軍ウェスパシヌスに鎮圧を命じました。彼は息子ティトゥスと共に周囲の町々を攻落せしめていき、エルサレムを徐々に孤立させていきました。ガリラヤ地方から攻めいきましたが、ヨセフスという人はユダヤ軍の指揮官でしたが、ローマ軍に投降しました。それから、彼はユダヤ反乱の一部始終を目撃して、それを書き記したのが「ユダヤ戦記」です。

ヨセフスがユダヤ戦記に書き記していることが、イエス様がここで語られていることがその通りになったことを確認させます。その時、ウェスパシヌスの息子ティトゥスが総督となっていました。エルサレムを包囲していた時に、神殿を破壊しないようにと命じていました。ところが一人の兵士が松明を神殿に投げ込んでしまい、内部が焼失したのです。すると、神殿を覆っていた金が溶け出して、石と石の隙間や、火の熱で石が欠けた隙間に流れ込みました。後日、それを取り出すために、石が取りのけられたのです。

ローマがエルサレムを取り囲み、神殿を破壊します。火を付けると、神殿の金の飾りが溶けはじめ、そして石の割れ目の中に入っていました。それを取り出すために、石を一つ一つ取り除いていったと言われています。イエス様が言われた通りになったのです。「どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることのない日が、やって来ます。」という言葉が、その通りになりました。

7 そこで彼らはイエスに尋ねた。「先生、それでは、いつ、そのようなことが起こるのですか。それ

が起こるときのしるしは、どのようなものですか。」

イエス様になぜ、このような質問をしたかという、旧約の預言に主の到来の前にエルサレムの破壊があることを予告しているところがあるからです。「ゼカ 14:1-2 見よ、【主】の日が来る。あなたから奪われた戦利品が、あなたのため中で分配される。「わたしはすべての国々を集めて、エルサレムを攻めさせる。都は取られ、家々は略奪され、女たちは犯される。都の半分は捕囚となって出て行く。しかし、残りの民は都から絶ち滅ぼされない。」それで神殿の破壊を、主が戻って来られる終わりの日と結びつけました。

8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れて、『私こそ、その者だ』とか『時は近づいた』とか言います。そんな人たちの後について行ってはいけません。9 戦争や暴動のことを聞いても、恐れてはいけません。まず、それらのことが必ず起こりますが、終わりはすぐには来ないからです。」

イエス様は、第一に「惑わされないように気をつけなさい」という注意を出されます。ユダヤ人の間では、「バル・コクバの乱」という、第二次ユダヤ人反乱が紀元後 132 年から起こり 135 年に終わりました。バル・コクバというリーダーをユダヤ人たちは抱きましたが、彼が自分がメシアであると公言し、ユダヤ教の指導者、ラビ・アキバもそれを支持しました。イエス様をメシアと信じていたユダヤ人で、その反乱に加わった人たちも、これにはついて行けなくなり離脱しました。ここでイエス様が警告していたとおりです。今日も、統一協会の文鮮明を始め、数々の異端カルト団体が、その教祖をメシアだとしています。けれども、それは終わりの徴ではないということです。

2B キリスト者への迫害 10-19

1C 世界での徴 10-11

10 それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、11 大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい光景や天からの大きなしるしが現れます。

前兆の始まりは、世界的な対立です。今までの戦争や暴動は地域的なものだけけれども、イエス様は、世界的な争いに注目させています。ここに書かれてあることです。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり」という言い回しは、歴代誌第二 14 章 6 節またイザヤ 19 章 2 節にも、全域で、という意味合いで使われています。イエス様は今、世界規模の話これからされますから、世界の全域で、民が民に、国が国に立ち上がるということです。私たちは、前の世紀に世界大戦を経験しました。そして、戦後はグローバル化して、けれどもグローバル化した中で民族同士の争いや、国同士の争いが起こっています。

そして大地震があります。これは前世期から幾何級数的に増加しています。人類に記録されて

いる大地震で、イエス様の後の千年間、合計五つの地震だけでした。14 世紀は 157、15 世紀は 174、16 世紀は 253、17 世紀は 278、18 世紀は 640、そして 19 世紀は 2119 もの記録的地震があり、20 世紀は 90 万件を超えたのです！¹このように地震が、世界大戦が起こった時に一気に増えているというのは、決して偶然ではなく、必然なのです。主なる神が、国々を揺り動かす始め、そして天地を揺り動かしています。

そして飢饉ですが、旱魃などによって飢饉になることもあるでしょうが、戦争によって強制移住させられたり、また産業が破壊されたりして、あるいは為政者の不作為によって、大規模な飢饉が起こることがあります。それも前世紀から起こっていますね、中国では毛沢東の大躍進政策によって、数千万の飢餓数を出しました。北朝鮮は 1990 年代にこちらも、為政者の愚策によって約三百万人が死んだと言われています。そして、飢饉が起これば免疫もなくなり、疫病も流行します。ですから、世界的な対立があり、その後の飢饉と疫病は付き物ということです。

そして残りは、「恐ろしい光景や天からの大きなしるし」ですが、これはまだ起こっていません。イエス様はこのことについては、後で詳しく語られます。これらの天変地異が起こってから、主が天から戻ってこられます。

2C キリスト者の忍耐と証し 12-19

12 しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。

イエス様は、「これらのことすべてが起こる前に」と言われています。これらの前兆の前に弟子たちは迫害を受ける、ということです。これらのことが、福音書の後、使徒の働きや書簡の中に書かれています。会堂に引き渡されるというのは、同じユダヤ人が自分を罪に定めるということです。ペテロやヨハネは、ユダヤ当局に捕えられました。そして牢は、ローマ当局に捕えられるということです。パウロは、カイサリアで牢に入れられている間、ローマ総督とヘロデ王の前で証しをしました。

13 それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。14 ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。15 あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。

使徒の働きは、これらのことも書き記しています。殉教したステパノは、聖霊に満たされて論破することによって、誰も反論できなかったことが書かれています。彼は殺されましたが、しかしその残した種は確実に、迫害者であるサウロ、後のパウロの心に残りました。イエス様が、すでに弟子

¹ Fruchtenbaum, A. G. (2003). *The footsteps of the Messiah : A study of the sequence of prophetic events* (Rev. ed.) (96-97). Tustin, CA: Ariel Ministries.

たちに語っておられました。人を恐れず神を恐れよ、そして聖霊が証しの言葉を与えてくださる、ということです。「12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」私たちにも、主は聖霊で満たしてください。人を恐れず、主を恐れて証しをする時に、同じようにしてください。

16 あなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにも裏切られます。中には殺される人もいます。17 また、わたしの名のために、すべての人に憎まれます。18 しかし、あなたがたの髪の毛一本も失われることはありません。19 あなたがたは、忍耐することによって自分のいのちを勝ち取りなさい。

「裏切られる」という言葉をイエス様は使われています。それは仲間としての絆がある者たちが、その絆を断ち切るからです。そして殉教者も出てきます。このことは、教会が歴史を通じて経験してきたことであり、現代にまで至っています。世界で最も迫害が酷いと言われている北朝鮮では、信者は布団を顔にかぶせて主を礼拝しています。なぜなら、家族の人に知られたら当局に知らされてしまうからです。そして、「わたしの名のために、みなの方に憎まれます。」とありますが、これは驚くべきことです。すべての善の源が、私たちの主イエス・キリストです。しかし、人々はその善を嫌い、悪を愛します。したがって、光が来るとそれを憎むのです。

けれども約束があり、決して害を受けることがないということです。殉教したとしても、その後、自分に対して何もすることができません。そして、「忍耐によって」いのちを勝ち取るといっていますが、この忍耐はただ我慢するという消極的なものではなく、神の約束を積極的に信じていき、その喜びに満たされ、熱心に祈るその中での忍耐です。この世における報いよりも、後の世に来る報いを期待して生きます。

3B エルサレム包囲 20-24

20 しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。21 そのとき、ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。都の中にいる人たちはそこから出て行きなさい。田舎にいる人たちは都に入ってはいけません。22 書かれていることがすべて成就する、報復の日々だからです。23 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。この地に大きな苦難があり、この民に御怒りが臨むからです。24 人々は剣の刃に倒れ、捕虜となって、あらゆる国の人々のところに連れて行かれ、異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。

マタイによる福音書、マルコによる福音書には、「荒らす忌まわしいもの」が聖所の中に入ること、をイエス様は語られています。ここは似ているようで、実はイエス様は違うことを語られています。

マタイとマルコは、私たちにとっても将来に現れる反キリストの預言ですが、ここは、「エルサレムが軍隊に囲まれる」ことで、捕虜として連れて行かれることで、エルサレムが異邦人に踏み荒らされることでもあります。これは、紀元後 70 年に起こった、エルサレムの破壊のことです。今、ローマに行きますと、「ティトゥスの凱旋門」というものがあります。そこに彫られているのが、ローマ兵たちが担いでいるメノラ(燭台)です。



エルサレム攻囲戦と言いますが、これによって 110 万人が死に、9 万 7 千人が捕虜となり、奴隷となったと言われています。66 年に始まったユダヤ反乱は、70 年のこの戦いを持ってほぼ終わりましたが、残党が死海ほとりにあるヘロデの要塞マサダに籠城し、73 年に玉砕しました。

エルサレムがローマに包囲されている時、ユダヤ人たちは、この時にメシアが到来してローマの力から解放してくださると信じて戦いましたが、キリスト者となったユダヤ人はそうは考えていませんでした。こここのイエス様の言葉をしっかりと心に携えていたからです。一時的に、封鎖が解除された時に、彼らはほぼ全員、主の命じられたことを守り行い、ヨルダン川を越えたところにある、デカポリスの一つペラに逃げました。それで、彼らはほとんど死ぬことがなかったことを、教会の指導者エウセビオスが「教会史」の中で書き記しています。

そしてそれが、「書かれているすべてのことが成就する報復の日」と主は言われていますが、これはモーセがイスラエルの民に残した預言と警告のことを指しています。イスラエルの民が主に聞き従わないために、都が包囲されて、そこで飢えで赤ん坊を食べるほどになり、主が宣言された呪いの全てが下るとい言葉の成就であります(申命 28 章)。主の怒りがご自分の民に下ったこ

²[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%82%B5%E3%83%AC%E3%83%A0%E6%94%BB%E5%9B%B2%E6%88%A6_\(70%E5%B9%B4\)#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Arch_of_Titus_Menorah.png](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%82%B5%E3%83%AC%E3%83%A0%E6%94%BB%E5%9B%B2%E6%88%A6_(70%E5%B9%B4)#/media/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Arch_of_Titus_Menorah.png)

とを見ることとなります。

そしてそれが、「書かれていることがすべて成就する、報復の日々」と主は言われていますが、これはモーセがイスラエルの民に残した預言と警告のことを指しています。イスラエルの民が主に聞き従わないために、都が包囲されて、そこで飢えで赤ん坊を食べるほどになり、主が宣言された呪いの全てが下るという言葉の成就であります(申命 28 章)。イエス様が、身重の女と幼子を持つ女は悲惨というのは、包囲されている時に飢えで赤ん坊を食べてしまうという預言が成就するからです。このようにして主の怒りがご自分の民に下ることの預言です。

そして 24 節に、「異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」という重要な預言があります。異邦人の時というのは、エルサレムが異邦人の支配の中にあり、踏みにじられてしまうことであります。バビロン捕囚の時から踏みにじられていましたが、紀元後 70 年にユダヤ人の世界離散は決定的なものとなりました。実に、前世紀にイスラエル国が再建されるまで異邦人に踏みにじられてきたのです。ローマは、二度に渡るユダヤ人反乱で、エルサレムとイスラエルの地から、ユダヤ的な痕跡を無くしてしまおうとしました。ハドリアヌス皇帝は、エルサレムを「アエリア・カピトリナ」とローマの神々に名前を変えました。そして神殿のあったところにも、ユピテルの神殿を置きました。そしてイスラエルの地は、「シリア・パレスチナ」と名づけました。そうです、今のパレスチナという名は、この時から始まりました。

ローマ帝国には、激しい迫害を受けながらキリスト者が増えて行きました。ついに、皇帝自身がキリスト教徒になります、コンスタンティヌスです。彼はビザンティオンという町にローマの都を移し、そこをコンスタンティノープルと名づけ、実に 1453 年まで続いたのです。キリスト教が国教となったビザンチン時代が始まります。コンスタンティヌスの母ヘレナが熱心なキリスト教徒で、聖地に巡礼にきました。イエス様が死なれ、葬られ、甦られたところに聖墳墓教会を建て、お生まれになったベツレヘムには聖誕教会を建て、そのようにしてエルサレムとその周辺をキリスト教化していったのです。

しかし、アラビア半島にイスラム教が始まりました。七世紀にイスラム教の勢力がエルサレムを支配下に置き、神殿の丘のところには岩のドームを建てました。イスラム時代が始まります。基本、神殿の丘はそれ以来、ずっとイスラムの支配下にあります。

ところが、イスラム教がヨーロッパ世界に拡大していくと、危機を覚えたヨーロッパのキリスト教社会は、十字軍によって聖地を奪還すべくやってきます。ここで十字軍はムスリムやユダヤ人の住民を虐殺しました。今日まで禍根を残しています。この十字軍が支配する時代が 11 世紀から 12 世紀まで続きます。けれども、サラディーンというイスラム教の勇士が十字軍に打ち勝ち、再びイスラム教の支配下に入ります。そして、エジプト出身のイスラム勢力であるマムルーク朝、そして、

オスマン・トルコ朝へと変遷します。オスマン朝の時に、今の旧市街にある城壁が建てられました。

そして欧米列強の近代に入ります。英国軍がオスマン・トルコ軍に第一世界大戦で聖地を舞台にして戦って打ち勝ち、戦後、国際連盟は英国に委任統治をさせます。英国委任統治時代が始まります。1918年のことです。その時に、驚くべきことが起こりました。バルフォア宣言が発表されました。それは、ユダヤ人がこの地を民族郷土にすることを宣言したものです。既にユダヤ人がロシアや東欧から帰還してきていました。ユダヤ人への迫害、すなわちポグロムが酷くなり、その帰還は加速化しました。先ほど、民は民に、国は国に立ち上がりというところで、世界大戦のことだとお話ししましたが、第一世界大戦の結果、ユダヤ人たちがこの地に帰還することが宣言されたのです。そして、ホロコーストが起こります。第二次世界大戦が終わり、ユダヤ人に対して行われたことが世界に認知され、同情が集まり、1947年11月に国際連合は、ユダヤ人が主権を持つ国を許す決議案を通したのです。そして1948年5月14日にイスラエル国として独立宣言します。第二次世界大戦が起こった結果、次にイスラエルが建国されたのです。

そして、周辺のアラブ諸国との戦い、独立戦争が起こり、1967年には六日戦争が勃発しました。その時に、イスラエル兵が神殿の丘に入り、その後、嘆きの壁に行き、そこでユダヤ教ラビは角笛を吹いて、ここがイスラエルの主権下に入ったことを知らしめたのです。長くなりましたが、これが、「異邦人の時が満ちるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」という、イエス様の言葉がどのように成就してきたのかの歴史であります。今、神殿の丘はイスラム当局の管轄にあります。ですから、まだ異邦人の支配は続いているとも言えます。これから、そこがどうなるのか？ということとは、イエス様が再臨される徴として最も注目すべき所です。

4B 天変地異 25-28

25 それから、太陽と月と星にしるしが現れ、地上では海と波が荒れどよめいて、諸国の民が不安に陥って苦悩します。26 人々は、この世界に起ころうとしていることを予測して、恐ろしさのあまり気を失います。天のもろもろの力が揺り動かされるからです。27 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見るのです。

これからの出来事は、天変地異です。世の終わりの徴として、旧約聖書には数限りなく、天における徴、地上における徴を予告しています。「ヨエ 2:10-11 地はその前で震え、天も揺れる。太陽も月も暗くなり、星もその輝きを失う。【主】はご自分の軍隊の先頭に立って声をあげられる。その陣営は非常に大きく、主のことばを行う者は強い。【主】の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられるだろう。」天変地異の後に、主が来られるということです。そして人の子が雲のうちに来られると言うのは、ダニエル書7章に書かれていることであり、イエス様は大祭司カヤパの前でダニエル書の預言を取り上げ、ご自身がキリストであることと証言されたのです。

28 これらのことが起こり始めたら、身を起し、頭を上げなさい。あなたがたの贖いが近づいているからです。」

その患難の時代に主を信じるようになった人々は、「贖いが近づいた」ことを知ります。贖いとは、これまで罪によって失われていたものが、神が代価を払って買い戻され、再びご自分の所有とされるということです。神はすでにキリストによって、その代価を支払われました。そして、キリストが戻ってこられる時に、ご自分の所有のものとなっている世界を、実際にご自分のものとされるのです。ペテロは使徒3章で、これを「回復の時」また「万物が改まる時」とも言っています。ローマ8章では、パウロは、「8:21 被造物全体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」と言いました。

2A 目を覚ました祈り 29-38

そして、イエス様は、これらの徴を注視していなさいということ、例えを持ってお語りになります。

1B いちじくの木の場合 29-33

29 それからイエスは、人々にたとえを話された。「いちじくの木や、すべての木を見なさい。30 木の芽が出ると、それを見て、すでに夏が近いことが、おのずから分かります。31 同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは神の国が近いことを知りなさい。

いちじくの木は、私たちには馴染みが薄いですね。けれども、夏になる直前に芽を出し、七月にはその実を楽しむことができます。それと同じように、これまでイエス様が語られたことが起こっているのを見るならば、イエス様が再来されることによってもたらされる、神の国は近いのだと言われています。いかがでしょうか？私たちは、異邦人の時が間もなく終わろうとしているのを見ます。国々が揺らいでいるのを見て、キリスト者に対する迫害が強くなっているのを見ます。地震も多くなっています。天変地異はまだ見ませんが、けれども、小さな兆候をいろいろ見えています。神の国が近い、その時期に入っているとみなさないといけないということです。

32 まことに、あなたがたに言います。すべてのことが起こるまで、この時代が過ぎ去ることは決してありません。33 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

ここで決して過ぎ去らないものを、イエス様は約束されています。一つは、「この時代」と訳されているものです。これは、「この世代」という訳もできます。ユダヤ人がいて、ユダヤ人が神のご計画と関わっている時代というのは、これらのことが過ぎ去ることはないとしています。ですから、私は、置換神学というものを信じていません。それは、イスラエル民族は、教会が始まったことによって神の計画の中で意味がなくなった、無効になったというものです。教会がイスラエルに置き換えら

れたとする考えです。これは間違いです。パウロはローマ 11 章で、イスラエルは見捨てられたと考えるのは、絶対にありえないと断言しています。ユダヤ民族が今も生きており、イスラエルに住んでいるということは、関係ないのではなく、今もこの時代が続いてたことの証左なのです。

そしてもう一つは、「わたしのことば」は過ぎ去ることはありません。天地が過ぎ去っても、必ずその語られた通りになるということです。主はここで、ご自分が神からの者であることを証言されています。主が語られるのは、そのものが神の言葉であるということです。「イザ 40:7-8 【主】の息吹がその上に吹くと、草はしおれ、花は散る。まことに民は草だ。草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことばは永遠に立つ。」だから、私たちは聖書の言葉、イエス様の言葉を大切にします。この天地よりも確かなのです。

2B 突然の災い 34-38

34 あなたがたの心が、放蕩や深酒や生活の思い煩いで押しつぶされていて、その日が罨のように、突然あなたがたに臨むことにならないように、よく気をつけなさい。35 その日は、全地の表に住むすべての人に突然臨むのです。

イエス様の次の勧めは、「よく気をつけている」ことです。放蕩や深酒に代表されるような、周囲がどうなっているのか分からなくさせる世の煩いがあります。その活動に、はまっていますが、自分だけが気づいていません。私たちは、この終わりの日にそのような世の思い煩いに囲まれています。主に関することを二の次にすること、主以外のものに取り組ませること、そして、いつの間にか信仰から離れ、他のことをしている状態です。本人だけは「大丈夫」だと思っていますが、全然、大丈夫ではないのです。突如として破壊が襲うので、何の備えもなく滅んでしまうのです。

「全地の表に住むすべての人に突然臨む」と強調されています。イエス様が語られていることが世界各地で起こっているのに、なぜか日本だけは免除されているという幻想を抱いてしまいます。自分だけは違うとして、災いを絶えず他人事にしていまいます。けれども、終わりの日は誰も免れることはできないのです。

36 しかし、あなたがたは、必ず起こるこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈っていなさい。」

そして二つの大事な動詞があります。一つは、「逃れる」ということです。これらの患難から逃れることができる、ということです。主はフィラデルフィアにある教会に、次のように約束してくださいました。「黙 3:10 あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている試練の時には、わたしもあなたを守る。」ここ「試練の時には」と訳されていますが、正確には「試練の時から」であります。したがって、試練そのものから守って

くださる、引き離してくださるということです。

そして、テサロニケ人への手紙では、これらの破滅、終わりの日に起こることをパウロが語った後に、こう言いました。「1テサロニケ 5:95:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」主が天から空中にまで降りて来てくださいます。キリストにあって死んだ人々がまずよみがえり、そして生き残っている私たちが一挙に引き上げられ、空中で主とお会いします。その携挙の出来事によって、後に来る患難を免れることができるのです。

そして、「人の子の前に立つ」という、「立つ」という動詞があります。主の前に立つことのできるのは、やましいことがなく、責められるところもなく、そのような責めから自由にされて、主の前にいることができるということです。キリストの血によって清められている私たちは大胆に、喜んで、この方に近づくことができるのです。「ユダ 24 あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる方・・・」

37 こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリーブという山で過ごされた。38 人々はみな朝早く、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとにやって来た。

イエス様がエルサレムに入られてから捕えられるまでの数日の間を、ルカはまとめています。民衆はイエス様の御言葉に興奮していましたが、すぐ後に十字架に付けろという怒号がイエス様に向けられます。彼らは後に、五旬節の時に「使 2:36 神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」とペテロに語られて、心が刺され、悔い改めました。主が十字架に付けられる困難な時にも、用心して目を覚ましていなければいけません。同じように終わりの日も困難になります。今のうちに、聖霊によって悔い改められる時に、心がまだ刺されるという繊細になっている時に、悔い改めて罪の赦しをいただきましょう。